

ツベタナ・クリステワ（国際基督教大学）

「和歌というメディア」

【要旨】

皆さんの学会に参加するのは、始めてなので、まず「思想史」においては「文学」の居場所があるかどうかについて調べてみた。解釈には多少の違いがあるものの、「文学」の役割は「思想」を描写し反映することにとどまる、という一般的な見解には変わりはないようである。

確かに、「対象となる〈思想〉についての考え方や歴史記述の方法によって、思想史の概念も多義的となる」（『世界大百科事典』平凡社）などの指摘に従って、「思想史」の内容は文化によって異なるはずだが、しかし、そもそも西洋の文化的実践を基にして発生し発展してきた学問なので、脱構築主義などのようなポストモダンの思想でさえ、構造を根本的に変えることがあっても、枠組みを変えることにはいたらなかった。

詳しく調べたわけではないが、どうやら従来の「日本の思想史」の研究も、内容こそ西洋とは異なるものの、枠組みは西洋のモデルに従っているようだ。焦点は近世以降の文化に置かれており、それ以前の文化の研究は、宗教的思想、すなわち神道と仏教の歴史を追究している。

そもそも「知」の形態は、すべての文化においては同様なのだろうか。クロード・レヴィ＝ストロースが主張しているように、「人間のもつ多様な知的能力をすべて同時に開発することはできません。ごく小さな一部分を使用しうるのみで、どの部分を用いるかは文化によって異なります。それだけのことです」（「”未開”思想と”文明”心性」（『神話と意味』、みすず書房、1996、26頁）。すると、主要な認識方法も、「知」の形態も、文化によって異なるはずである。だから、原点に戻って「日本の思想史」の枠組みを考え直さないかぎり、日本の知的遺産を十分に把握できないのではなからうか。

頼りになりうるのは、文化的実践そのものである。心を入れ替えて古代日本文化に目を向けると、旧来の思想史の土台を根底的に批判し新しい視座をひらいたフーコーの想像さえ超える、ある異例の現象に気づく。日本文化の独自の姿を作り上げてきた平安社会においては、何と和歌が権力の表徴であり、思想の土台をなす「言説」の手段だったということだ。

発表のなかで、一般的コミュニケーションの手段から哲学的議論のメディアまで、平安社会における和歌の働きをたどり、理由について簡単に触れてから、和歌による哲学的ディスカールの例を紹介する。よみ込まれた「自然」の見解や「あいまいさ」などの主要な概念は、老子・荘子思想にさかのぼっているので、道教の思想が仏教の思想の前に広がり、その普及のための基盤を築いたことに着目したい。